

教師の教育観の重要性

—自己評価と授業改善の一体化—

○中島 雅子^A

NAKAJIMA Masako

埼玉大学教育学部

【キーワード】 自己評価, 授業改善, 教育観, OPPA, 本質的な問い

1 研究の背景

PISA 調査でも明らかになった学習意欲低下問題は、日本の理科教育において火急の課題である。このような教育現場における課題の解決においては、「概念の形成過程の自覚化」という視点が、示唆に富むと考える。なぜならば、学習者がその意味を形成する過程に注目することによって、「なぜ勉強するのか、この勉強は自分たちにとってどのような意味があるのか」という教育のあり方を実感しにくいという問題を克服する可能性があると考えからである。

さらに、そこでは、教師の教育観が大きく影響すると考える。なぜならば、「なぜ勉強するのか」といった教育のあり方は、教える側である教師の教育観に基づくところが大きいと考えられるからである。

2 研究の取り組み

(1) 研究経過

以上を鑑み、これまで理論と、「一枚ポートフォリオ評価法 (OPPA : One Page Portfolio Assessment)、以下 OPPA と記す」を活用した実践の両面から研究を重ねてきた (図1)。具体的には、次の4点である。

- ① 概念の形成過程の自覚化の具体として OPPA の有効性を明らかにした。
- ② これにより、学習者の自己評価に基づく教師の授業改善が可能になることを明らかにした。
- ③ そこでは、OPP シート (OPPA で使用するシート) による概念の形成過程の可視化と OPPA を学習者が好意的に受け止めていることが有効に働く要素であること、および、教師の教育観により、その効果に差異が見られることを明らかにした。
- ④ OPPA の活用により、教師の教育観の育成および、変容が可能であること、さらに、それは、OPP シートに設定する「本質的な

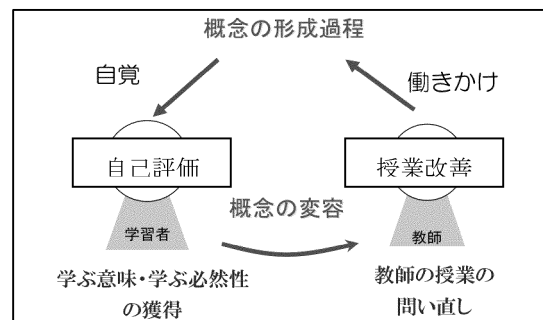


図1 概念の形成過程の自覚化を重視した「自己評価」に基づく「授業改善」

問い」が有効に働く可能性があることを明らかにした。

(2) 課題設定

そこで、本課題研究では、授業改善のための教師の教育観育成について、OPPA の「本質的な問い」の再考を行い、その効果を検証する。

(3) 各研究課題

課題設定に基づき、小学校と中学校を事例に次のテーマで研究を行った。

- ① 山下春美「本質的な問い」と教師の授業改善—小学校6年「ものの燃え方と空気」の単元を事例にして—
- ② 辻本昭彦「本質的な問い」と教師の教育観の変容—教材から概念形成へ—

(4) 研究討議

本課題研究では、次の視点から討議を行う。

- 視点1 自己評価と授業改善
- 視点2 授業改善と教師の教育観

指定討論者：堀 哲夫 (山梨大学副学長)

参考文献

- 堀 哲夫(2013)『教育評価の本質を問う 一枚ポートフォリオ評価法 OPPA 一枚の用紙の可能性』東洋館出版社。
- 中島雅子, 松本伸示 (2014) 「概念形成の自覚化に注目した理科教育の自己評価に関する一考察 —自己評価のとらえ方の変遷を中心として—」『日本教科教育学会誌』Vol.37, NO.2, 71-80.